私は「迷心之術」として、「迷情秘箓」に記されていた「烈女淫」を油の灯りに燃やし始め、やがて微かな異臭が漂い始めました。祖宜は身体が弱くなり、私に頼るようになりました。「祖宜さん、今日の天気は本当に暑いですね。お疲れ様です。もし疲れたら、ベッドで少し休んでください。私が残りの仕事をします。」私は彼女に話しかけ、彼女は弱々しく頷いて私に従い、ベッドに上がりました。
忽然、一陣の香りが吹き抜け、灼熱の身体が後ろから私を抱きしめた。祖宜は息切れしながら、「あぁ！……おじさん……熱い……！」と言った。「助けて……私を助けて……」彼女は私の体を乱暴に探り回し、冷却できるものを探しているようだった。そして、腰の間にある巨大かつ太く硬い肉柱を見つけ出した。

彼女はもはや恥を慮ることなく、私の前に跪き、それを口の中に咥え込んで飲み込もうとした。熱く焼けつくような巨大な竜が彼女の心を落ち着かせたようで、彼女は一心不乱にそれを握りしめて吸い付いていた。「あぁ！……んぅ！……うぅっ……！」その卓越した口技は、誰でもができるものではなかった。私は「剣月山荘」に男は少なく、陳灌希が彼女の処女を奪うことはなかったと思う。「あぁ！祖宜！……何をしているんだい？……」私はびっくりして尋ねた。

「……おじさん……助けて……祖宜が気持ちいいから……!」彼女は嘆息を漏らし、私を押し倒して身体をこすりつけ、内に秘めた欲望を抑え込んでいた。

私たちの衣服は枯れた葉のように飛び散り、一度に我々は全裸になってしまった。「烈女淫」は本当に強引で、たった 16 歳の少女をこんなにも激しく淫らにさせてしまった。

私が不思議に思ったのは、彼女がまだ結婚していないことを知っているのに、大きくて硬いものをもてあそべるということだった。一度に半分ほどの太く荒々しい龍が、彼女の小さな穴に入り込んでいた。

「あぁ！……うっ！……痛い！……！」彼女は美しい瞳を見開き、幼い陰唇を硬く口紅に咬みつけながら、太くて硬い竜を身体に纏い付けていた。浪人で満たされているにも関わらず、彼女の小さな穴の中にはまだ入り口があり、私の硬い亀頭が子宮口に向かって撃ち抜かれていた。

祖宜は涙目で言った。「あぁ！……お願い、動かさないで……痛い……！」私は初めて女性器に挿入する感覚を味わい、それが本当に美しいものだと感じた。濡れた柔らかな陰唇が灼熱の玉茎をしっかりと包んでいた。私は幸せそうに言った。「祖宜……君の穴は本当に気持ちがいいよ……最高だ……」私は彼女の両腰を掴み、彼女の柔らかな身体を感じた。
祖宜は私の胸の上で息を荒くしてうつ伏せになり、熱く膨らんだものを優しい場所に留めてくれました。しかし、「烈女淫」の影響で、膣内にかゆみや刺激が伝わり、私の大きな亀頭によってかくされるまで止まらなくなり、細い腰を軽く揺らして、太い筋肉が陰唇を擦りながら快感を味わいました。

冷静で高貴な大娘は娼婦のように両足を開き、彼女の陰穴は私の大きな肉棒を急速に呑み込んで、喜んで言いました。「喔…主人啊！…干我，干我，…噢…噢…美…用力啊！用力…干小淫妇…吧！…深一点……喔…喔！…好爽…噢…噢…美啊！…好爽……喔……喔…不要…停！用力…深一点……喔…噢…噢…美…喔…喔……私は絶頂する...!」彼女の白く柔らかな体が震え、すぐに彼女の粉色のお尻を高くして、私がより深く差し込めるようにしました。

私はすぐに速く抜き差しを始め、陰嚢は彼女のお尻にぶつかって、パチン、プッシュ、プッシュ、パチン、プッシュ、プッシュと音が鳴りました。そして、時々身を屈めて彼女の豊かな乳房を揉みしだき、肉穴は締まって若くて柔らかい！大きな龍頭を吸い付けた。最も驚くべきことは、床で表現され、彼女たちの目が大きく開いたことです。私は張百芝と李嘉因を数十回抜き差ししてから、戻って玉嬬を口に含み、彼女の青春の陰道を舌で舐めて、浪液を流させました。二人の母親と一緒にベッドにいて、私に犯され、気持ち良さそうな表情を見せています。

三人の女性は見て、心が興奮しました。凶悍な巨龍は、張百芝の小さな肉穴をいっぱいに膨らませました。梁落施は乳首がかゆく感じ、そして、钟恩胴の手が彼女と李嘉因の胸を撫で回しています。彼女の衣服はすでに開かれています。四つの美しい乳房が鐘恩胴によって遊ばれている。不思議な欲望に焦がれて、彼女たちは混乱した状態で部屋に連れて行かれました。
より刺激的な状況で、ベッドの上で演技を行い、彼女たちを魅了しました。私は張百芝と陳玉嬬の２つの美しい体を重ね合わせ、勇敢に交互に２つの白くて毛のない小さな肉穴を荒々しく捲きました。「プシュ…喔…プシュ…パチン…パチン…噢…噢…主人！美…啊！用力…干小淫婦…吧！…深く…もっと深く…喔…喔！…気持ちいい…噢…噢…美しい雪！気持ちいい…雪！…喔……喔…止めないで！もっと深く…プシュ…喔…噢…噢…喔…私は美しく死にます！……」鐘恩胴は私の腰に首を伸ばして、私の２つの跳弾宝珠を舐め回した後、「主人！この３人の美女をお楽しみください」と言いました。

私は張百芝と陳玉嬬の２人を何十回も交互に挿し込んだ後、彼女に熱いキスを与え、そして彼女に張百芝の両方の肉穴を舐めさせました。そして、私は欲望に焦がれて裸になった３人の美女に尋ねました。「私たちを突きまくって欲しいですか？」 李嘉因は最初に膝をつき、私の陰茎を握りました。関芝林と梁落施も即座に加わり、張百芝の淫液で濡れた私の陰茎を成熟した技術で舐めました。「嘓…雪…雪…喔…ああ…」 ３人は口技を駆使し、私の心をつかむことを望みました。

彼女たちが過剰に浪費しているのを見て、私は彼女たちに「赤陽神功」を使って外陰部の陰毛を剃るよう命じました。６つの柔らかい肉の穴が並んでおり、浪水が流れ出て私の粗い巨竜を誘惑しています。私は勇敢に大きな陰茎を挿入し、一度にそれぞれの幼い肉穴に根元まで入れました。